

ぺんぺん草花にして Ⅱ



すずはら なずな

「思い出の一枚」といえば

一面のコスモスの花の中　小さな二人目の娘を抱いている私。

3歳の長女は赤い花柄のワンピースで笑っている。

ふふ、若いじゃん、私。

「思い出の一枚」といったら、やっぱり　これかなあ・・・

青空の下、このメンバーで撮れた最後の写真だ。

その夏の最後のお出かけ。〇〇山。

山の上はもうすっかり秋色で、コスモスがいっぱい広がってた。

長女と次女は年子だったのだけれど

成長のゆっくりしていた次女は　まだ歩くこともできず、

同じくらいの年頃の兄弟なら

もう一緒に、とてとてと追いかけてこしたり、

親が二人相手にボール転がして遊んだりできたのに、

それも叶わなかった。

私たち親が、上手に育てたというよりは、

次女自身が「身体に無理をかけない生き方」を、知っていたかのようなのだ。

のんびりと、大きな病気もせず　何の心配もかけず　生まれて1年半が過ぎた。

いや、「病気」はいつも傍に控えていたし、心配すべきことは山盛りあったはず・・・なんだけどね。

長女はそんな妹の事情を知ってか知らずか、

無理なことはさせず、我がままも言わず、

先天性の心臓疾患を持って生まれた妹の、小さな成長と一緒に喜んでくれた。

この日も山の上で、兄弟や親と遊ぶほかの子ども達の中で

ひとりでただ走り回って「楽しさ」を表現してくれたのを思い出す。

写真を久しぶりに出して見ると、このときの長女の笑顔には

何だか少し無理してる感じがあるのは　気のせいではないだろう。

元気だと思ってた腕の中の小さな次女。

けれど、改めて見たら、やっぱり「健康な1歳」の表情とは

どこか違う。

私はそこから 目を逸らしていたのかな。

9月には入院の予定が入り、
生まれたときからの「予定」であった、手術の日程が決まった。
秋が深まるのを 肌で感じながらの 病院通いが始まり
せっぱつまった思いの中、何とかこの日々を留めたいと感じ、
日記をつけることを始めた。

日記は辛い内容になったけれど、「書くことで癒される」ことに気づかされ、
それが、「創ることで救われる」私のその後に 繋がった。
それこそが、次女からのプレゼントだったと思っている。
ここで、言うね。
ありがとう。
本当に、ありがとう。

写真の中の私たちは、その日からの「先」を知らず
そんな「知らないでいた時間」をそこに留めている。

ひんやりした山の空気を思い出す。
少し切ない 秋の気配のする一枚の写真だ。

Mちゃんの結婚

Mちゃんに 親戚のおばさんがお見合いの話を持ってきた。
相手が4人兄弟の三男坊だってことを お母さんがたいそう気に入って
いちど会うだけ会ってみるようになった。
Mちゃんは まだまだ結婚なんて 考えてもなかったんだけどね。

写真のそのひとは 有名な真珠の産地の有名な銅像の前で、カッコつけて立っていた。
生真面目な人柄が 全身からにじみ出る感じで
しみじみ見ると なんだかちょっと 笑えてくる。

型どおりの レストランでの顔合わせ。
弾まない会話。微妙な空気。
なのに彼の話から たまたま 最近通勤途中で見かける Mちゃんの憧れの人が
彼の会社のひとで、しかも妻子持ちなのが解ってしまった。

後は若いお二人で...なんて言われても 気まずいばかりで時間が長く感じる。
思った通りの 地味で大人しい相手だった。

こんなもんだね、「次」はもう 絶対がないなあ。
そう思ったた。 Mちゃんは別に気にもしていなかったんだ。

だけど数日後 意外や意外。
「もう一度お会いしたい」と 連絡があった。

その日、彼は車を誰かに借りてきていた。
海までドライブ、そして船に乗る、そんなコースを 一生懸命調べて、決めてきているのはバレ
バレだ。
だけどまあ、風は冷たいけれど いいお天気の日だったし、Mちゃんは 楽しむことに決めた。
上機嫌で 好き勝手におしゃべりし続けた。 彼はうんうん頷いて聞いてくれた。
船の上 あんまり風が気持ちよかったし 遠くの島や鳥の群れ しっかり見たかったから
「私 メガネかけますね、せっかくなのに あんまり見えなくて」
おしゃれでも何でもないメガネを バックから取り出して掛けたんだ。

それから数日、あっちから「また連絡していいですか」、って言ったのに
彼からの連絡がない。
やっぱり あんまりだったかな。自分ばかりしゃべってたし。

楽しくなかったのかな・・・でも。

そういえば さよならする時にクチュンとくしゃみをした。

風邪でもひいたのかな、何だか心配になってきた。

そういえば 随分薄着だったっけ。

気が付いたら 電話掛けていた。

それから 二人はどうなったかって？

そうそう、これは つい最近の話なんだけど

Mちゃんは 家のご主人の机の引き出しから 2枚の写真を見つけたんだ。

あれ、何でこんなところに、そう思って ご主人に聞くと

ご主人、テレくさそうに言ったんだって。

その2枚の写真を お見合いの前に貰ったんだ。

盛装して澄ましてる1枚と ハイキングの格好でスッピンで笑ってる1枚

どっちが 本当のあなたかな、って興味を持った。

船の上で おしゃべりし続け メガネかけて 嬉しそうに景色眺めてた

そんな あなたに惹かれたのだ、と。

船の上、寒くても言いだせなくて 風邪引いて 会社を数日お休みしてた彼

さよならの前のくしゃみ、電話の向こうで 鼻水すすってた彼

うふふ 私も やっぱり あなたが良かった。

2枚の写真は 今でも ご主人の宝物なのだ。

60過ぎて なお元気な 私の年上のお友達である。

巫女が三人

友達と電化製品の話をしていると 彼女がおもしろいことを言う

うちの 洗濯機さ、
ちっちゃい巫女さんが3人いたの
呪われたら 怖いから
やっと 買い換えた

いつもながら 表現力の豊かな子である。

古くなった洗濯機が
回すたび

シャンツ シャンツ シャンツ

と いうんだそうで。

話を聞いていた 別の友人は
「いやぁ、巫女さんって 『呪わ』ないでしょー」

そういうところで ツッコむか？

でも 洗濯機の中
ちっちゃい巫女さんが3人
鈴振ってる姿は 想像するだけで 笑える。

帰って うちの 洗濯機を 回してみたら
口笛で鳥を呼ぶ おじさんが 住んでいた。

おじさんは 「呪う」んだろうか・・・なんて 考えていると

洗濯も結構 楽しめたのだった。

けっして忘れないこと

(キミたちが、会えなかった　もう一人のお姉ちゃんの　生まれた時の話をさせてね。)

「ウン、生まれたよお、元気、元気。
凄く楽だったよ。　ツルンて感じ。
ちょっと小さかったからかなあ・・・
いいよ、いつでも会いに来てね。」

夜中に二人目の赤ちゃんを産んだ。
その朝、お母さんは浮かれていた。
一人目のときは、長びく陣痛と、酷い出血があったけど、
今回は、朝の自分の元気さに、時間も体力も持て余していた。

産んですぐは、母子別室なので
面会時間に ガラス越しに見に行くだけでいい。
公衆電話の周りをウロウロし、
友達に 出産の報告の電話を かけまくった。
何にも考えてなかったよ。
ほら、お母さんは大事なときには、カンがちっとも働かない。

面会用の小部屋で、看護師さんに名前を言って待つ。
赤ちゃんが連れてこられる・・・はずだった。
待ち時間が、長い。
とても、長い。
不安が初めて、心の隅から広がりだした。

別室のガラス越し、保育器の中で、赤ちゃんは
小さな指をピクピク　動かしていた。
唇の動いている様子も、遠いガラス越しでも、ちゃんと　判る。
そして、思ってもみなかったことを　お医者さんは言ったんだ。

赤ちゃんは　いずれ　手術しなくてはなりません・・・。
おっぱいを飲む力がつくまで、一日一回練習に来てください。
あとは、哺乳瓶使います。
母乳が出たら、搾乳して持って来て下さいね。

お母さんは予定通り退院できますよ。

何が一番悲しかったかって？

そうね、気が付かなかった事だな。

五体満足でさえあればとか、健康でさえあれば・・・

・・・とすら思ってなかった・・・

当たり前のように思ってたんだ。

そして、産婦人科の病棟が、

生まれる喜びだけで 満ちているものだと思ってたんだ。

おなかの中で、そんなに頑張ってることなんて、全く知らないで、

生まれてからもあんなハコの中で 唇動かして、

おっぱい待ってるなんて 思いもしないでいた。

自分が情けなくて、赤ちゃんに申し訳なくて

お母さんはぼろぼろ泣いた。

母子同室になったら使うはずだった、おしり拭きの綿花を

カットしながら、 ぼろぼろ泣いた。

そのあと、どうしたのって？

そのあとね、お母さん、ひとつだけ決めたんだ。

いいおっぱい、いっぱい作る。

こんなにいらないよって 言われるくらい、

いっぱい搾って 持って行く。

だって それしか、してあげられない。

だから、クヨクヨしてて

おっぱいが 涸れちゃわないようにするってね。

お母さん、面白いよ、だって、それからはね、

肩で風切って （病院内の廊下だから風は吹かないの）

ノシノシ歩いたんだよ。

怖い顔？

それはしてないよ。だって赤ちゃん、びっくりするもの。

あのときがあったから、今キミたちとこうしている。
だから、キミたちを抱きしめる。
思い出と一緒に抱きしめる。

今でも ときどき、思い出す。ノシノシ歩いてた若い自分。
少しずつ話すから・・・また、聞いてね。

鈍感だったことに救われたのかもしれない

その病棟には 結構重い病状や長期入院のこどもたちがいて
有名な専門病院だったので家が遠方の子もいて、
母親はアパートを借りて看病にあたったり
その夏着ることがないかもしれない、水着や麦わら帽子が
ベッドのそばに飾ってあったり
寝巻きばかりじゃかわいそう・・・と思うのか、かわいい部屋着を着ているこどもや
髪飾りでいつもおしゃれさせてもらっているこどもがいた。

6人部屋の廊下側にうちの子は入った。
入った次の日、面会&昼ごはん食べさせに行くと、一番窓側のお母さんが、なにやら探している。
聞くと 「ブランドものの」（と 彼女はそこを強調した）パジャマがなくなったという。
彼女は目立つタイプの美人のお母さんだった。
新参者の私にも気軽に声を掛け、最初にあいさつした日も看護婦さんたちに囲まれて談笑していた。

一度目の入院で必要だったので また要るのかと持って来ていたフタつきのバケツ、
今回は不要だったので ベッドの下に入れていたのだが、
数日後その中をふと見ると、なんと入っていたのだ。その「ブランドもののパジャマ」が。

あれ、ここにあるの そうじゃないですか？
アレ ソンナトコにアッタのね、ヨカッタ。アリガトウ。
そんな風な会話だけ したと思う。

結局 病院になじむ間も 人間関係を把握する間もなく
手術の日が来て、その後の事情で
私は病院に通う必要がなくなってしまった。

今考えるに いや、考えたくはないのだけれど・・・
誰かが誰かに対して、なんらかの
悪意を持っていたのかもしれない。
だとしたらターゲットはいったい誰だったのか
何が誰を 傷つけたのか
誰が何で傷ついていたのか

傷ついた誰かが何をしたかったのか

たった一日のこと、自分と子どもに まず思い当たるふしはない。

今思い出しても なんとなく 解答を求めたくない

鈍感のままで 過ごしておきたい話・・・なんだな。

年のはじめの...

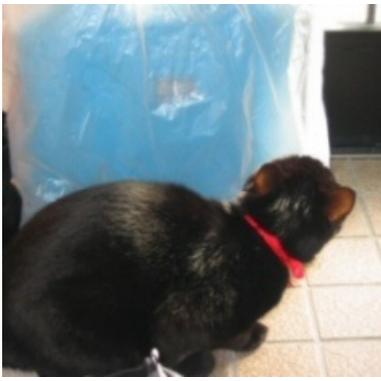


なんてこと無い一日の朝が来て
新しい年が始まりました。

すずめが次々に集まって
玄関のささやかな しめ縄の稲穂を
ついばんでいます。

内弁慶な うちのねこは
玄関扉の内側の灯油タンクの陰から
すりガラス越しに 覗き見て

きゅるる きゅるる
鳴いていたりしています。



お正月って何さ
ねこが聞きます。

美味しい缶詰のごはん もらえる日だっていうんなら
クリスマスでも誰かの誕生日でもいいさ。
おめでとう、って言ってやるよ。
ねこがいます。

今年もよろしくね、
ねこに言い

それでも あちらこちらと出かけるので
お留守番させていただきます。

ホントはひとりが好きなんじゃないかな
暗くても平気なんじゃないかな

それでも。

遅くに 家族が帰ってきたら
冷える玄関で いつからそこにいたのか
ねこは待っていたような顔をして丸まっていて
ぞろぞろと部屋に入って 電気をつけたりなんぞしていると

早くからお皿にいれていったはずのフードを
今気づいたかのように足元でかりかり食べ

家族がコートや荷物を片付けて
ほこほこ温もりだした一つ部屋で
一息ついてたりしますと

いつの間に上がったのやら
ソファの背もたれの上
誰よりも高い特等の席で
何だかちょっと幸せそうに 何だかちょっと偉そうに

うとうとうとうと 眠るのです。

浴衣 砂利道 虫の声

浴衣2枚が 手術の時と術後に必要だと言われ 慌てて探しに行った。
もう9月だったので 時期はずれのため なかなか見つからなくて
子ども服の店の棚の奥から やっと見つけ出して買ったものだ。

その2枚の内1枚を着て 手術に向い
後1枚を着ないまま その子は旅立った。

そんな浴衣をあげると言われても 却って困るかなと思ったが
病室仲間のTちゃんのお母さんは受け取ってくれた。
遠いところから 泊りがけでTちゃんの所に来ている若いお母さんだった。

もうすっかり 遠い記憶で
色んな事が あやふやだ。

だけど 時折思い出すのは
夏から秋へ 季節が変わる頃
毎日歩いた土手ぞいの歩道、公園を抜ける砂利の道。

夏草の土手 蝉の声 突き抜ける青い空 入道雲
少しずつ変わる 空は うろこ雲
つくつくぼうしの方が いつしか消えて
秋の花がちらほらする草むらから 虫の声が聞こえ出したこと

青い空 高く高く昇っていく 誰かの手を離れた風船や
台風の低い黒い雲の隙間から光がさし 虹が見えたこと
どんなことも 今の自分に繋げて 喜んだり悲しんだりしたこと

きっと 歳をとっても この季節が来たら
必ず 思い出すんだろうな、と思うのだ。

それでも明日は続くんだ

知り合いのお兄さんが亡くなった。
小さい子どもとこれから生まれる命を残し
家族を残し
自分で この世の未来を絶った。

近所でだんなさんが亡くなった。
詳しいことは知らないが
病気で身体が壊れてしまった。
子どもが成人し、
これからは奥さんとふたり
楽しむこともできたのに

生きることって
きっと 単純で
だけど 複雑で
ひとりのようで
ひとりじゃなくて

誰かの大切な人が今日いなくなっても
今日は今日で続いていて
あたしはご飯をつくり
テレビを観て
あははなんて笑うこともでき

たぶんそれが逆に 明日いなくなるのが
あたしや あたしの大事な人だとしても
やっぱり
ひとは その日を普通に生きて
きっと それで いいんだと思う。

生きているって難しくて
生きているだけでも 凄いなだね。

としよりはいそがしい

日ごろ 忙しくないから、余計
予定が入ると 頑張っちゃうのか

そのうち顔出すね、っていったら
今か今かと待つし

お昼ころかな・・・というと
12時過ぎに着いても 遅かったねー、といわれる

3時半ころ行けるかな、といったら
解った、夕飯にお寿司取ってあげるね、と言い

あ、 そんなに早く用意しなくても・・・、ともう一度電話かけなおしたら
もう お寿司頼んだよ。3時半には来るからね・・・

早い・・・
早すぎる。

解ってるんだ。
それでなくても、4時ごろには 夕飯にしようかと言い
5時前には 食べようといい
6時半には もう帰りなさいと急かされる。

いそいそと帰り支度すると
寂しそうな顔をせず、ああ ゆっくりできる
あんた達いると 忙しくてかなわんわ・・・
なんて 憎まれ口言って。

そして 数日置いて電話でもしたら
何してたの、最近 電話もなくて・・・

なんて 文句言う

んでも、少し喋るか喋らないうちに
じゃあね、はい。

ぶちんと 電話は切れるのだ。

．．．．うちの 親の話である。

思い出し笑いのネタは尽きない

同じ職場で同じ仕事の担当は スラリと背の高い年上美人のHさんと
私と同じくらいの背（実は150cmくらいしかないのだ） ちょっと若いKちゃん、私の3人。

この仕事を始めて どうやら私は オトボケキャラが確定してしまっている。
物忘れて帰る、思い出して戻るなんて ほぼ毎日のことだし 自転車カゴにお弁当の入った袋を
放置のまま
お昼どきまで気がつかないことも 数度あり

自転車カギは失くすわ 自転車で転ぶわ
変な立ち方のせいで 新しい靴の かかとだけ 外すわ・・・（これは靴が悪いのだと思う）

Kちゃんのエプロン（制服の代わりにエプロンに名札を着用）を 気づかず着けていて
「いつから Kさんになったの？」 と指摘され
名札見て びっくりとか （数時間 私はKちゃんの名札を着けていたわけだ）。
ま そんなことも 笑って 終わりなんだけどね。

また 同じくらいの身長なもので Kちゃんとは着る（着ることのできる）服も 似通うらしく
あ、そんなの持ってる、とか 今日の似てるよね、ってことも多いのだ。

この間 帰ろうとして 上着を取ってはおると
（上着脱いでエプロン着けるだけなので 個別のロッカーは使わず パイプハンガーに皆一緒に
掛けている）

Kちゃんが

「わー そのジャケットも 一緒かなー よく似てるの多いよねえ！」

「そうだよねーなんか おそろみたい！」

ニコニコ 話していて 二人 ふと 止まる・・・・・・・・

「あれ」

「あ・・・・れ・・・・これって・・・・」

似たジャケットでは確かにありましたが
私が着て とつとつ 帰り支度してたジャケットは よく見ると Kちゃんのものだった。

爆笑。

どっちもどっちだよ、と言って笑ったのに おとぼけは どうやらいつも私の方らしい。(やっぱ、そうなの?)

「死」について語ること

「こんな辛くて悲しいことを、これから何回もオレは経験しなきゃいけないのか」

両方の祖父とおじさんを次々に亡くし、そう 呟く 高校生の彼。
お母さんは 彼に言ったんだって。

誰もがいずれは死ぬんだよ。もちろん自分も例外じゃない。

その時に「できることだけ できる範囲で」やりなさい。
自分の生活に無理をしてはいけない。負担に思うことはしてはいけない。

死に行くひとが、どんな形であれ、死後にこうしてくれああしてくれ、
あるいは自分が余命いくばくかになった時、意識が亡くなったとき、
周りのひとに して欲しいと望むことなんて 言うべきじゃないと 自分は思ってる。

生きて生活している人が、自分のできる範囲でやりなさい。
そして、それが自分の望みだから、心配するな、と。

どんなに心を尽くしたひとでもやっぱり
ああすれば良かった こうした方が良かったのではないかな、と後々思い悩むんだ。
遺言さえあれば、本人の希望さえはっきりしていれば・・・と思うかもしれないけれど、

きっとそれでも、

その通りにしてもいいものか悩んだり、しがらみや何かの都合でその通りにできなかったと悔や
んだり
生き残った者は どうしたって思うんだ。

ころっと死にたいんだけどねえ。どうなるか解らないでしょ？

50代の彼女は 締めくくりのにそう言って笑うのだけれど、
母が子どもに 伝える言葉、深くて確かな愛に溢れてて

うーん 彼女は凄いなあ、としみじみ思った。

人生はこれからで どんなことがあってもやり直しが十分効くんだよ、
そんな風にお母さんに言ってもらえる彼は

きっと、人生を大切に生きていくんだろうな。

そんな風に 思ったのだった。

先生のアロエ

先生と呼ばれていたおばあちゃんがいた。
ご自身から過去なさっていたお仕事は聞いたことがない。

趣味でなさっていたのだろう。
千代紙で「着物」を器用に折って、色紙に貼った飾り物を
そっと差し出すように 頂いたことがある。

一度下さった後、やっぱりビニールでカバーしておくわ、と
持ち帰りもう一度持ってきて下さった。

老人会の時 素敵な黒いターバン風の帽子をかぶり 杖をつき
他の人に解らないように お手伝いの私にずっと アメを差し入れてくれた。

カラオケが嫌いで 老人会でカラオケをする話が出ると
いつも反対なさったと 後で聞いた。

長らくお顔を見ないなと思っていたら
入院先で亡くなった。一昨年の話だ。

独り暮らしだったので 遠方から親族の方がみえ
結構日にちをかけ 遺品の整理をし、手続きをし
あいさつをされた。

植木鉢なんかはどうでしょう？
土は植え込みに捨てていいかなあ？

ご親族にすべてお任せするものなので
こちらからは 特になにも言わなかった。

後日 「先生」のお友達が来て

相談なんやけど・・・と言われる。

先生の入院中　ポストに溜まるチラシを捨てたり　郵便物をより分けたりして　お世話をした人だ。

アロエがたくさんあるんやわ。

先生が鉢に入れ　本当は自室で育てるもんだけど

外の植え込みのところ、

ほら　子供さんなんかがケガした時とかアロエはいいからって

あそこにね、

こーんなに大きくなってるの。

捨てなあかんかなあ？いや、あたしが引き取ってもいいんだけど
大きいものだしね　親族さんは捨てるっておっしゃってるけれど...

集会所の窓の下

エアコンの室外機から出るなま温かい風にあたりながら

捨てられなかったアロエは　元気に育っている。

水をやるでもないのに　いつかは巨木に育ちそうな感じだ。

数日前　レンジで温めたもので　うっかりやけどした。

傷に良いという話を思い出して　先生のアロエから肉厚の葉を選びとり

頂いてみた。

トゲトゲのところを包丁で取り、半分にスライスして

中のやわらかいところの液を　塗り込んでみる。

プルンとした透明な葉の中身を　すりこむと

赤く腫れたやけど跡が　少しずつ退いていく気がする。

先生が亡くなって　2年経った　お盆のことである。

ぺんぺん草花束にして II

<http://p.booklog.jp/book/44763>

著者：すずはら なずな

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nazunasuzuhara/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44763>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44763>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.